

横田基地フィールドワーク、撤去運動の闘い

——歴史と現在

津川 正洋

1 三多摩格差の最大の温床 横田基地を歩いてみよう！

首都東京の多摩地域中部に位置する巨大米軍基地・横田基地の実相を理解するには基地の周りを歩くことをお勧めする。額に汗が滲む健康的な歩きで1周すると2時間54分かかった。鉄道利用ならJR八高線箱根ヶ崎駅下車。車利用なら「みずほエコパーク」の広い無料駐車場にデポして、国道16号線をめざそう。新青梅街道がクロスする交差点が出発点だ。

ストップウォッチをスタート。八王子方面に国道16号の歩道を歩く。緑の丘が見える。右に右に曲がる坂を上っていくと誘導灯が見える。300m程行くと「むさし北」の交差点が出てくる。反時計回りで横田基地をまわると横田基地の占める地理的な問題点を実感することができる。

八高線が右を走る中、バイパスと合流すると横田基地のフェンスが見えてきた。誘導灯の赤い光が不気味である。まだ人家はなくガソリンスタンドや廃業したガソリンスタンドが続いている。やがて金網で滑走路が見えていた16号との境がコンクリート製のフェンスに変わり、基地への目隠しになってきた。大型トラックがスピードを上げて走る轟音が響く。朝晩のラッシュアワー通勤帯は、たった6kmを抜けるのに30分近くかかる。もしも片側2車線でなく片側3車線・自転車専用ラインがあったらどんなに快適であろう。2車線

左端の車道を大型車の風圧にあおられて必死の形相で自転車を漕ぐサイクリストを見てそう思う。

やがて「ドン・キホーテ瑞穂店」。ここは、かつてドライブインがあった場所で横田基地が一望できる名所である。今でもこのビルの5階に上がると基地が一望できる。営業時間は午前9時から午前5時の20時間営業。ぜひ上ってみて欲しい。もう一つ眺望できる場所は瑞穂町大字石畑2355番地の六道山公園内展望塔である。午前9時から午後4時まで、西側からの基地の姿が一望できる。

ドン・キホーテ東側の建物はターミナルゲート12ゲートに隣接した東京税関立川出張所構内旅具検査場、そして東京出入国在留管理局が並ぶ。昔トイレを貸してもらえないかと立ち寄ったら断られたことがあった。「ここは米国です。日本ではない」。16号を挟んで唯一南側にある米軍横田基地のエリア「西住宅地区」と基地本体を結ぶ日本人が渡れない歩道橋がまたいでいる。そして、八高線の線路が「米国内」を走っている。そのエリアにはTOMODACHI LANESの看板を掲げたボウリングセンターがあったり、レンタカー・観光バス・ワゴン車が留められていたりする。早朝、前夜から福生の街で飲んでいたのか外国人カップルとすれ違った。

メインゲート第2ゲート辺りは横文字の看板の飲食店が立ち並ぶ。オキナワ58号沿いと似た雰囲気だ。私たちが抗議行動で要請団を送り出す時には第2ゲートを固く閉ざし、デモ隊が通り過ぎるとゲートが開く。そして、177回を数え毎月第

3日曜日13時から実施している座り込みの会場がフレンドシップパークである。第5ゲートを過ぎ、左手の基地内は主要な管理地区である。第5空軍司令部・在日米軍司令部そして航空自衛隊航空総隊司令部がある。第5ゲートの東側にはゆったりとした中学校・高等学校校舎、そしてグラウンド・体育館が見える。

16号と別れ、五日市街道を基地に沿って進むと「車も止まらなくてよい踏切」を渡る。線路に沿って行けるところまで行くと、線路がゲートで遮断されている。JRからの燃料運搬用引き込み線である。毎週1回ここを通るディーゼル機関車がけん引するタンクローリー貨物列車は鉄道ファンの間では貴重な写真となっている。さらに進むと、右手に小さな公園が見えてくる。福東トモダチ公園である。由来には、一番先に本国に逃げ帰ったにも関わらず、一面的にこう記されている。「この公園は誰でも仲良く遊んで交流しみんながともだちになれる施設として2014年1月6日にここ福東に誕生しました。公園の北側には2011年3月11日に発生した東日本大震災の救援のためにトモダチ作戦を行ったアメリカ軍横田基地を望むことができます。園内には日本との永い友好を記念してアメリカが福生市に贈ったアメリカハナミズキも植えられています。この地に大きな災害が起きた際には市民の皆さんの避難場所にもなります。みなさんがともだちになっていつまでもこの公園を大切に利用してください」と。ここでもオスプレイの反対抗議集会が開催された。

この東側に「失われた街」堀向商店住居跡地の堀向児童遊園があり、横田平和まつり会場になった場所である。さらに、飛行機の離着陸コースの真下にあたる騒音被害の一番深刻だった拝島市立第二小学校もある。朝会の時飛行機が頭上に来ると、校庭に並ぶ教職員も児童も一切ポーズ状態に陥るのだ。黙ってやり過ごし、飛行機が行き去

り騒音が無くなるとポーズが解除される。その流れに着任したばかりの教職員が驚いたという。

信号を左折して西砂川バイパスに入るとすぐに18ゲート（通称・サウスゲート）がある。オスプレイを間近に見たのもこの辺りだった。いつもは閉鎖されている。そしてその先90度に折れた先が旧五日市街道だ。不自然に道路が直角に曲がり、黄色い大きな矢印看板がドライバーへの注意を喚起する。米軍横田基地ができるまでは、この地点から南下第5ゲートに真っ直ぐつながっていたのだ。基地のために街道が大きく迂回、曲げられていなければ、今日のような渋滞はなかっただろう。

またフェンスに沿って左折すると、基地内を通る片側一車線の周遊道路が見える。日本車が多い、日本と同じ左側通行である。違うのはそのあとに見た光景であった。辺りは緑が生い茂り16号沿いと様子が一変する。北海道の基地の様にも見える。頑張って歩くと、フェンス内に見えてくる光景が優雅そのものである。手入れの行き届いた緑の全面芝生とその奥のテラスハウスだ。プールやバーベキューグリル・木製の山小屋風の物置。道路を隔てた建売りの日本の住宅と比べるとギャップが大きい。第17ゲート（イーストゲート）。このエリアは「東住宅地区」と呼ばれている。病院もある。なるべくフェンス沿いの小道を迷路のように選ぶと、次々にアメリカの優雅な生活の一端を垣間見ることができる。これも思いやり予算だ。

さらにフェンスを目印に進むと車で来ては見ることのできない風景に出会えた。フェンスを隔ててアメリカと日本が混在していた。畑・耕作地が広がり基地から離れるが、やがて最後の目的地石川島播磨重工（IHI）へつながるバス通りに出てホッとする。この辺りが射撃訓練場、泡消火剤が使われた疑いのある消火訓練場、オスプレイ関連施設である。西に進むとIHIの高い建物が見えて

くる。そこを目印に信号を左折すると広い駐車場があり、基地のフェンスにぶつかる。ここから見えるレーダーの辺りが泡消火剤の訓練現場とされているところである。2022年秋は目視できたが、マスコミ報道のためか、シートで目隠しされていた。

ここから奥がIHIの関連施設である。この場所にIHIがあることに大きな政治的戦略的意味がある。1990年代から2004年3月、大手軍需産業・石川島播磨重工の思想差別事件の和解まで、何回も宣伝カーを繰り出し、三多摩の仲間と支援に足を運んだ場所である。ここから最西端までのフェンス沿いの道は反対側が手に取るよう見える幅600メートルの見通しの良い場所で、航空写真家の脚立が乱立する日もある。第20ゲート（オスプレイ施設工事用）の手前も90度に折れている。とても車幅が広く、タクシードライバーさんの休憩場所は米軍横田基地ができる前旧16号が直線で伸びていた場所である。

程なくして出発点に戻ってきた。ストップウォッチを止める。歩いた距離14.44km。時間2時間53分30秒。横田基地は3つの顔を持つ、一つ目は16号沿いの司令部のある管理部分とオキナワ58号線を沿いを連想させる若者の集まるにぎやかなストリートである。二つ目は東住宅部のような病院・テラスハウス高層住宅などの高級住宅街である。三つ目は北側オスプレイ関連施設射撃訓練場・消火訓練場。IHIの関連施設のバールに隠された部分である。

もしこの横田基地が撤去されたら、と思う。新青梅街道と国道16号線を結ぶ道路が何本もでき、多摩湖まで伸びるサイクリングロードもでき、三多摩の交通利便性が大きく向上するだろう。美術館や劇場など緑の人間性を回復する施設の建設、農作地として無限の可能性を持っている。首都東京の基地・横田基地はいらないと改めて実感した。

2 三多摩労連の闘いの歴史と現代

第1回「横田平和まつり」は1986年9月13日（土）、14日（日）に、基地被害の甚大さから移住を余儀なくされた「失われた街」堀向商店街・住宅跡の一部である堀向児童遊園を会場に行われた。

この年の4月、厚木基地訴訟が高裁で全面敗訴した。このままでは横田基地訴訟も負けるかもしれない。不当判決をはね返すためには裁判闘争だけでなく幅広い市民ぐるみの国民的運動をつくり上げなくてはならない。硬い集会でなく、地域の住民も参加できる楽しい大々的な「まつり」にしよう、横田訴訟団から三多摩労連・三多摩春闘共闘に呼びかけがあった。それが「横田平和まつり」だ。

その年は横田公害訴訟も10年を迎え、「国連国際平和年」に当たっていた。三多摩労連を軸に、三多摩全域の労働組合・婦人団体・平和団体が構成された実行委員会が結成された。第1回実行委員長に松岡英夫さん（革新統一都知事候補）に引き受けていただいた。その後、浜林正夫さん（一橋大学名誉教授）が実行委員長を務めた。スローガンは「静かな夜を返せ!」。北海道矢臼別の広大な自衛隊演習場の中に唯一残された農民と共にたたかうための「平和盆踊り大会」がヒントとなり、前夜祭で盆踊りも実施した。

雨の中にもかかわらず地元婦人会の方々が櫓の上でお揃いの浴衣で踊り、地元の住民を巻き込んだ第1回「横田平和まつり」はスタートした。翌日快晴。「雨上がりコンサート」で、三多摩中を演奏していた三多摩青年合唱団のうたごえ、シンガーソングライターの横井久美子さんや梅原司平さんが登壇し、ただ訴えるだけの舞台でなく、文化薫る一体感のある楽しい舞台となった、またテ

ントエリアも配置し、東京土建西多摩支部の「ヤマメの塩焼き」や焼きそば・綿あめ・かき氷・金魚すくいなど賛同団体の40余りのテントが並び、子ども連れ・家族ぐるみで楽しめるものとなった。そして、同時に、頭上を低空の軍用機の爆音が響き、参加者は墜落の恐怖を実感した。

三宅島NLP（夜間離発着訓練）基地反対運動や逗子市池子米軍住宅建設反対運動の仲間も参加し、厚木にも三宅島にもNLPはいらないとアピール、全国の基地問題でたたかう市民と連帯をした。基地反対闘争の高まりでマスコミ取材も集中、大きな反響があった。第1回目はのべ2千人が参加し大成功をおさめた。その後、「1回で終わらせるのは惜しい」と毎年秋に実施する方向を打ち出した。後半には三多摩労連役員が事務局長を務めた。また自治体首長にも賛同を呼びかけて実行委員が東奔西走した。

その成果もあり、参加者は最高時は7千人を超えた。「横田平和まつり」の成功も影響し、飛行差し止め自体は勝ち取れなかったが、横田訴訟は東京高裁でも最高裁でも「軍事公共性論」を退ける画期的判決で勝利した。横田基地の面前で住民が基地被害を直に訴え、それを楽しく工夫して日本各地の反対運動と連帯する活動に発展させていったことは、米軍横田基地と日本政府にも一定の大きな脅威を与えた。日本各地の米軍基地周辺住民を激励し沖縄嘉手納・厚木・小松での勝利につながり、アメリカをも被告とした6千人もの原告住民が結集する新たな横田基地公害裁判に発展していった。

「横田平和まつり」にピリオドを打った後、大衆的な運動として2010年から取り組まれたのが横田市民交流集会であった。米軍横田基地を含む米軍再編計画が持ち上がる中、2008年に二つの団体が発足した。航空総隊司令部の横田基地への移転工事が契機となり立川・昭島市民を中心に発

足した「横田基地問題を考える会」と、「横田基地の撤去を求める西多摩の会」である。この二つの団体のほか、横田騒音訴訟弁護団、九条の会など平和問題に関心を寄せていた団体個人が集まり、「横田基地もいらない！沖縄と共に声をあげよう市民交流集会」実行委員会が誕生した。この代表の一人に三多摩労連の役員も参加し、今年（2023年）で第14回目となる。

集会の名称の中に「沖縄と共に声をあげよう」を掲げている通り、毎年沖縄県民との連帯をしっかりと位置づけ、集会を開いてきた。沖縄では民意に反して辺野古への新基地建設が強行され、南西諸島では自衛隊基地建設が強行され、迎撃ミサイルが配備され、さらに敵基地攻撃能力を持つ長距離ミサイルの配備が狙われている。このままでは米中の軍事衝突に巻き込まれ、「再び沖縄は捨て石にされるのでは」という不安と怒りの声が高まっている。

また、漁民・住民の反対を無視し、日米共同の巨大戦争訓練基地建設が進行している鹿児島県種子島の離島「馬毛島」問題も重大だ。一方、横田基地では米軍の対中軍事衝突に備えての基地機能強化、欠陥機オスプレイによる軍事訓練のレベルアップが進み、米中間に何かあれば戦争推進基地としてミサイル攻撃の対象になりかねない危険な基地となっている。こうした中、軍事に対して軍事で対応する大軍拡の道＝戦争する国への道は破滅への道だと、米中の対立を絶対に戦争させない道、対話による新しい平和外交を追求する運動が広がっている。三多摩にある横田基地に隣接する私たちの生活の場が、気がつかないうちに極めて危険な場になってきているという現実をリアルに把握し、平和憲法を持つ日本こそが、対立を戦争にさせない道、軍事同盟強化の道を見直し、対話による平和外交の道を探ること、このことを三多摩労連の運動方針として労働組合はもとより三多

摩中の諸団体個人に発信していきたい。

いま、発がん性の危険性が極めて高いとされる PFAS（有機フッ素化合物）による飲料水汚染が各地で大きな問題となっている。

三多摩地域における PFAS 汚染の実態、とりわけ横田基地由来の PFAS 汚染の実態を解明す

る上で、日米地位協定と日米合同委員会合意により日本側の調査権が米軍に握られていることが大きな障害となっている状況がある。住民の健康確保という点からも、今こそ日米地位協定の改定が必要不可欠であることを広く発信していきたい。

（つがわ まさひろ・三多摩労連事務局長）

【参考文献】

『三多摩労連の歩み』三多摩労連、2003年7月

『横田基地 その変遷とたたかひの記録 第二版』横田基地問題を考える会、2022年10月